

うんが よければ、とんでもない ごちそうに ありつくことも できます。

「ただ はやいものがち。すぐに うりきれて、ほんじつへいてんに なってしまいます。」

「いそげ いそげ」

のらッコは トサカを ふりふり、わっさわっさとおかを かけおりました。

海のおいが してきました。

ポォーッ ポォーッ。

ふねのきてきが きこえます。

「おーっと！」

こうえんのいりぐちで、のらッコは キッキートと

きゅうブレーキ。

みなとレストランには ひとあし はやく、にがてなお客が きていました。

カモメたちです。

「おおぜいで やってきては、なんでも かんでも 食べつくしてしまいます。じぶんたちの なかまがいのものが いくと、よってたかって つつきに きます。」

「コッコォー、きょうは カモメなんかに まけないぞ！」

首を つきだして、のらッコは とっしん しました。

「まったく、にわとりって やつは！」

「しょくじのマナーも 知らないわね」

カモメたちは 大さわぎしながら 海に とびたっていました。

「けさは もう おなかが いっぱいになったのでしょう。あとには くいちらかした のこりものしか ありません。」

「まったく、カモメって やつは！」

のらッコは ベンチの下を さがしました。

くしゃくしゃに なった おべんとうの はこのかげに、ソーセージのかけらと エビフライのしっぽが みえます。

「おっ！」

のらッコが 足で かきよせて 食べようとしたときです。

ベンチの うしろにある 花だんの中から、どろだらけのねこが できました。

茶色の 長い毛が、もしかもしゃ からまっていて、ど

れが 耳やら 鼻やら しっぽやら、わからないくらいです。

「おなかが すいたニャー」

「どろんこねこが みどり色の まるい目で、こちをじーっと みつめています。」

ソーセージのかけらと エビフライのしっぽは、やっとみつけた 朝ごはんです。

「どろどろの のらニャーか。おまえも はらぺこなんだ」